

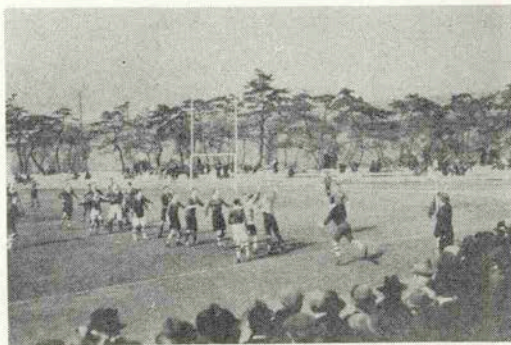
神戸遊戯誌100

★神戸にある大先輩クラーク氏の墓



▲ 神戸諏訪山公園にある“Boys, be ambitious”で知られたクラーク氏の墓

▼ 神戸外人(KRAC)と横浜外人(YCAC)のインターポートマッチ(於東遊園地、大正4年)



ラグビー① 青木 重雄

「神戸遊戯誌」も本回ですでに百回を数えることになった。その間九年を経ているのだから筆者としても感慨なきを得ない。その百回目に「生誕百年」の歴史を持つラグビー(一八七一年一月二六日にイギリスにラグビー協会が設立された)について書くことは一つの機縁といえる。そもそも中世紀にイギリスのイングランドにローマ人が持ち込んだといわれるフットボールが元祖とされているラグビーのことだから、その歴史はずいぶん古いわけだが、フットボール(サッカー)もそのうちに含まれていた)の中から真にラグビーの名に価するラグビー競技が生まれたのはラグビー協会が設立されてからのことである。昨年九月その百年を記念して世界最強チームの全イングランド軍が来日、花園球場(大阪)などで全日本チームらと対戦、大型チームの魅力を存分に見せてくれたことも、ラグビーファンにとってはまだ記憶に

新しいところだろう。

このラグビーも日本に輸入されてからすでに七十余年になる。その意味では日本は世界のラグビー界の先輩国の一つといわれてよからう。すなわちわが国に初めてラグビーのチームが生まれたのは、明治三二年である。当時、慶応義塾(現在の慶大)の教授で、ケンブリッジ大学のラグビー選手であったクラーク氏と、同じくケンブリッジ大学に学んで、同大学のカレッジ選手だったことのある慶応の先輩田中銀之助氏の手によって慶応義塾で始められたのが日本ラグビーの創始である。だが、厳密な意味ではこれが最初でなく、それ以前すでに神戸、横浜の在留英人たちの手で移入され、外人同士の試合が行なわれていた、日本人チームの最初の試合が行なわれたのは明治三四年である。チーム創設後二年間の練習を積んだ慶応が横浜外人クラブに試合を申し込み二月七日に横浜公園グラウンドで試合が行なわれたが、勝敗は三五対五で大敗を喫した。だが、この試合が導火線となっ

て、日本人チームの活躍はしだいに向上の道をたどった。この時のメンバーに田中氏がHBに、クラーク氏がFBにそれぞれコーチ兼任で出場していることも見逃がせないところだ。このクラーク氏の墓が現在神戸の諏訪山公園の修法ヶ原にある外人墓地にあることは神戸市民にもあまり知られていないようだが、ラグビーファンにとっては興味深い事実だろう。おもに関東で活躍した同氏の墓がなぜ神戸にあるのかという正確な理由は知られていないようだ。

日本人チームでは慶大の他に明治四〇年代に群馬県の太田中にラグビーが生まれたが、これは長続きせず消滅してしまった。関西にラグビーチームが生まれたのは第三高等学校（京都、明治四四年）で、すぐつづいて同志社大にも作られた。さらに翌年には京一中、同志社普通部にもできた。三高は当時京都の下加茂の森で練習を行っていたが、昨年同所の糺（ただす）の森に関西で初のキックが行なわれたという記念の碑が立てられた。

関西に日本人チームが創設されたことはラグビー競技の発達に役立ち、明治四四年四月には東京で三高対慶応、四五年一月には三高グラウンドで同志社対慶応のおおの第一回戦が行なわれ、引き続き定期戦となって続けられた。その後関西では三高、同志社両雄の対立時代がかなり長らく続いたが、大正七年一月に大阪豊中グラウンドで行なわれた大毎主催第一回全国蹴球大会には両校の他に慶応と京都一商が参加、この時は同大が優勝した。それ以前にも大正三、四年ごろの関西には京一中出身の一中クラブ、大谷光明氏を中心とする錦華殿クラブ、三高を中心とする神陵クラブ等があり、五年ごろには後年の京大チームの前身ともいえるべき京大を中心とする天狗クラブが作られ、八年にはオールホワイトが組織された。同チームは関西の学校の出身者を集めたクラブチームで、このクラブは慶応卒業後引き続き大阪にあって長く関西のラグビー界の世話をした杉本貞一氏をはじめ、脇肇、竹上四郎氏等の努力によるものだった。

大正末期は日本ラグビーの興隆期となり、大正一二年以後明大につづいて早大、東西の帝大が生まれ、さらに関大、関学、大阪高商、大阪外語、大阪高校、神戸高商などの阪神勢が誕生した。こうした情勢を反映して一四年にはついに西部ラグビー蹴球協会（関東ラグビー蹴球協会は一三年にすでに設立済み）ができて、各ラグビー試合時の競技規則や入場料の問題なども協議決定され、関西ラグビー界の基礎はいよいよ固まった。わが神戸勢の創設が京阪勢より遅れたことは残念だったが、ミナト・コウベがゴルフと同様に日本におけるラグビーの発祥の地の一つだったことは否めない。すなわち神戸外人（KRAC）と横浜外人（YCAC）両チームのインターポットマッチは東遊園地でじつに明治三九年から引きつづき催されていたし、KRACと慶応チームとの試合もいち早く東遊園地で行なわれ、まだラグビー試合を見慣れない多くの日本人ファンを熱狂させたものだった。明治から昭和初期へかけては東遊園地は専管居留地の一角として同グラウンドもテニスコートも外人の使用権が優先していて、日本人は肩身の狭い思いで競技に参加させてもらうといった実情だったから、その日頃のうっ血した感情がKRACと慶応などの日本人チームのマッチの時に爆発したことも古いラグビーファンにとってはなつかしい思い出の一つだろう。

「日本人チームとKRACチームの試合の時は東遊園地の日本人ファンがエキサイトしてしまてね。からだの小さい日本人選手に、でっかいからだの外人選手をタックルしてひっくり返してやれーと大声援なんです。観衆のヤジの悪いことでもコウベが全国一番だったようです。東遊園地附近の沖仲士や人力車夫が多かったことも原因でしようね」としみじみ語るのには、日本へのラグビー紹介の大先輩の一人であり、同時にKRACチームの最大功労者の一人である親日英人JOEY・ABRAHAM氏（日本名・簡 譲衛、神戸大洋商事株式会社社長）の述べである。

西ドイツの

障害者の町

橋本 明



「グーテン・モルゲン」と、朝六時になると夜勤のリヒターさんが、部屋のドアをノックして各職員を起してまわる。もともと、この60近い、人のいいおしゃべりなおじいさんは、第二次大戦中日本軍の捕虜といっしょに、しばらく収容所で過した事があるとかで、多少の日本語をおぼえており、私の部屋は「オハヨゴザイマス」といってノックした。夏の朝六時、といえは日本ではもう陽がのぼって明るいが、緯度でいえば樺太の真中あたりに相当するこの中部ドイツではまだ真暗だ。仕事着に着替えて食堂に集まると、まず聖書を輪読し、そのあと讃美歌を唱和する。ドイツ語など単語五つぐらいいしか知らないうえに、非常なオンチである私にとってはどうしようもない時間である。キリスト教の精神に基いて創設された町だけに、ベーテルの施設や通りの名にはほとんど聖書からとった名前がつけられており、ベーテルの朝はまずこのお祈りから始まる。

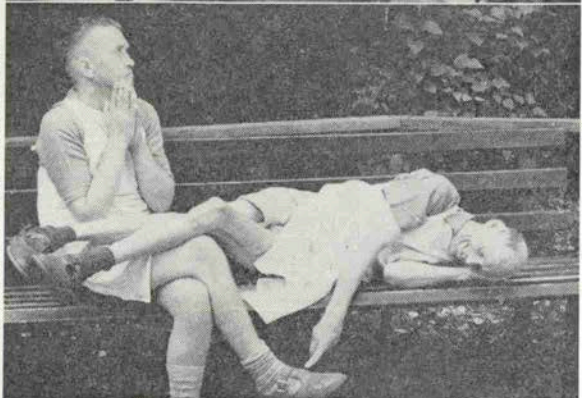
私の働いていた「マハナイム」というのは、大人の男性重症患者の施設で、20才の青年から60才ぐらいのおじいさんにいたるまで、約35人の患者が生活しており、ほとんどが精神薄弱であり、言語障害を伴っている。他の施設では手に負えなくなった患者ばかりを収容している

のでその世話も仲々苦勞が多く、ベーテルの見学者もめったにここを訪れることはないという、いわば見はなされた施設でもあった。

さて、朝七時になると患者たちの部屋におもむき、一人一人を起してまわる。一人づつバジャマを脱がせてすっ裸にし、パンツからはじめて、着せかえ人形のように一枚一枚服を着せていく。全部着せ終ると洗面所につれていき、これまた一人一人の顔を洗い、歯をみがき、身体をふき、髪をとく。そのあと八時、十二時、五時の三度の食事時以外、彼らは、天気の良い日は中庭で、悪い日は室内で時間を過す。夕食が終ると朝とは逆に、一人

一人の着物を脱がし、身体をふき、バジャマを着せて各自のベッドに寝かせてしまう。毎日の生活が、判で押したように規則正しく事務的にくり返される。ここは男性の施設なので、保母にあたる女性の職員が一人もいないこともあって、ますらお派出夫よろしく、患者の下着の洗濯から食事の仕度、後片づけ、部屋のそうじ、患者の身の回りの世話、その他何でも男性の職員が、きょうにこなす。私もここで働く以上、これらの仕事を何でもこなすように努力せざるをえなかった。が、やはり大量にウンコのついたパンツを何十枚も手で洗うという作業にはかなりの精神的鍛練を必要とした。

彼等のひげそりは二日に一度、風呂は一週間に一度までとめて入れることになっている。風呂の時はちょっぴり手がかかり、一人一人の身体を頭の先から足の先までていねいに洗っていると半日はかかる。彼らは細長い浴槽にただゴロンと横になって湯につかっているだけで、三助よろしく、汗を流してフウフウいって洗っているのは職員の方。なかには洗っている最中に、浴槽の中で平気な顔して大便をする者もいるから始末が悪い。浴槽がたちまち便器に早がわり。仕方なく、またお湯を入れかえて洗いなおす。全部洗い終った時はもうこっかがグッタ



「僕たち死ぬまで一緒だね」と仲むつまじいオーガスト氏（右）とハインリッヒ氏。

今日は皆でハイキング。人生は楽しみなくちゃあ（前列真中筆者）

二日に一度のヒゲ剃りの時間。いやがって逃げ出す者もいる。

リ。彼らはニコニコ。これじゃあまるで王様と奴隷だ。

毎日起居を共にして彼ら一人一人の個性や相互の人間関係を観察してみるととてもおもしろい。おしなべて画一化されたサラリーマンとはちがって彼らは一人一人が実に個性的な存在だ。誰が何というかと、気のむいた時に一人でリズムをとって踊り出す者、大声で独言をいいつづける者、一定の間隔をおいて、一オクターブ高い矯正をあげる者、目を離すとすぐすっ裸になって逃げ出す者など。また男性だけの施設なので、ほほえましい、ホモ的？な関係が生まれることもある。たとえばオーガスト氏とハインリッヒ氏（女形）は共に50すぎのおじさんだが、この二人ははた目も羨むほど仲がいい。やせっぽちでハゲ頭のオーガスト氏は小太りでヒゲづらのハインリッヒ氏の手を引いてどこにでも一緒にいき、片時も離れない。食事の時は二人並んで坐り、寝る時も隣同志のベッドで寝る。時々冗談に、ハインリッヒ氏にいたづらをする、オーガスト氏がそれこそハゲ頭から湯気を出して怒り出し、それでもやめないと、ツバをぶっかけられるから大変だ。私もハゲ頭をなでいて一度ツバをか

けられた。しかし何はともあれ、35人共みな非常に純心で素朴そのものなのには心うたれる。20才すぎのある青年は、一日中熊のぬいぐるみで遊び、寝る時もそのクマちゃんを大事そうに抱いて寝る。60才の暗いホフマン氏（前ページ写真）は小さなガラクタを集めて紐でくくり、ペンダントがわりにして首からつるすのを趣味にしている。私は彼らが文句なしに好きだ。これほどユニークな人間の集りというの珍しい。彼らといっしょにしていると、こっちがオタオタしてしまう。個性的な彼らの中にあつては、没個性的な私の方がまさに異常なる存在であった。三カ月間の滞在を終えて、この町を離れる前の日に、彼らに「明日はマイネ・ハイマート（私の故郷）に帰るんだよ」といったら「ジャイダー（残念だなあ）」といつて別れを惜しんでくれた。帰る場所のない彼らにとって、私のこの言葉は酷だったかもしれない。ウンコの始末で手をやかせたディッター君やツバをかけられたハゲ頭氏等に今度いつ会えるかわからない。が、またぜひ会いたい。彼らと共に過したペーテルの数々の思い出は、生涯私の心から消えることはないだろう。

色で着るきもの

前田 親夫

〈きものデザイナー〉



日本では昔から「きもの二代、味三代」といわれていますが、中国のことわざでも「二世の大夫味を知り、三世の大夫衣服を知る」といわれるほど衣服を重要視しています。世界中でも日本のきものは最高の美しさ。欧米では形を重点においていますが、日本のきものは図柄が生命です。現在はその図柄と形がゆきずまった状態といえます。ここで必要なのは色彩です。色は無限の可能性を秘めてきものに新しい息吹きをあたえようとしています。

戦後、きものはブームのつてはいるのですが、今迄のきもの文化は、慶長、桃山文化を追求していて、現代に生きる進歩的な女性に着せるにはあまりには古典追求でありすぎると思っています。現代のきものは即マキシでありドレスであるという感覚と、世界に通ずる色彩をとりいれて、民族衣裳の域にとどまらない脱きものでありたいものです。それにしても現代は、きものが生活からはなれて外国の衣服のような遠ざかりを感じるのはほんとに悲しい。洋服は機能的、きものは非機能的といわれますが、これは着こなしにあるので、きものにも袴とか、モンペなどのように機能性を考えたものがありほんとうの良さを知らないからでしょう。

きものの流れを歴史的に見ますと、平安は姫文化、戦国は小姓文化、江戸は傾成の文化、明治は芸妓の文化、大正はカフェ、現代はホテル・バーの文化、といった変遷をもたらしながら、そこに色彩の変化が見られます。

そこで、私が作品をつくる時、現代の日本人の生活は和洋折衷で、洋服が即日本のきものになっているのですから、きものも古いカラーでは困るわけです。だから戦後まもなく芦屋で考案衣裳としてきものデザインを初めたとき、いちはやく神戸のローカルカラーをとりいれました。神戸のしゃれたすっきりした、洗練されたタツチ、街全体に漂よっているエキゾチックな香りは、モダンなカラーです。色にたとえればモンイエローのような。これをきものデザインカラーに、つめたくてクールでそのくせ暖かで、しゃれっ気のある淡彩な色を私は追求しています。もちろん一人一人の女性の個性に合せて……。をお教えしましょう。

自分が好きだと思ふものが必ずしも似合うものでないのがきものです。まず自分自身の皮膚の色に合せることそして体型、次は構図。構図というのはきものの絵柄ですが、反物のときと仕上ったからの結果をよく考えることが大事です。それから色はその人の個性がでるのですから自分に合った色合せを。そして何故着るのかその目的、TPOへの配慮と、季節に對しての趣好。これらの条件が全部そろわないと充分ではありません。

それほどに難しいかわり、また楽しさもたっぷりあるといえます。私が尊敬する明治時代のベストドレッサーは新派の花柳章太郎さん。明治の女の生活からにじみだす素晴らしい舞台

Serizawa

12月1日

大阪ミナミ虹の街店

12月12日

心齋橋パルコ店

オープンいたします。



A Happy

より新しいファッション

セリザワ

婦人服飾・紳士服飾

あたらしい年、あたらしいファッション、あたらしいあなた、あたらしいセリザワ。

神戸／大丸前紳士服飾店・大丸前婦人服飾店・三宮センター街店・さんちかタウン店・サンプラザ店 大阪／梅田阪急三番街店
虹の街店・心齋橋パルコ店・東京／東急百貨店日本橋店・東急百貨店渋谷店・池袋パルコ店 京都／藤井大丸店 姫路／やまとやしき店

A HAPPY NEW YEAR

西ドイツの旅 1ヘローゼンブルグへ



ネクタイの

元町バザー

神戸元町1丁目TEL (331) 14017031

東京  東急百貨店

渋谷本店 / 日本橋店

あけまして
おめでとう
ございます

モデル／岡田由利（K.F.G.）



装 苑

シックなあなたを創る
オーダーサロン

藤井まつ子

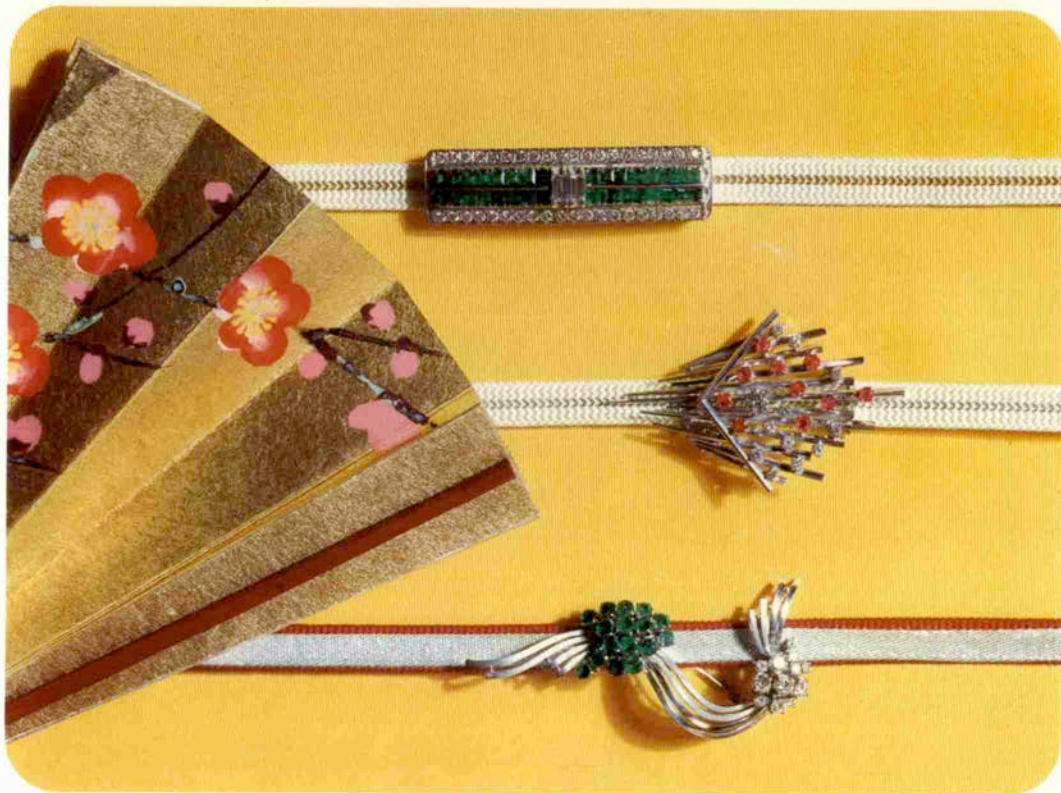
大丸前店／生田区三宮町3丁目12 〈331〉7550
京町店／生田区三宮町1丁目17 〈331〉2038
六甲店／灘区将軍通3丁目4-24 〈871〉8303

レストラン 六甲クラブ

六甲ケーブル駅下TEL 861-4121-2
営業時間A M 10:00 - A M 2:00
年中無休 駐車場完備 〈30台収容〉

■メニューの中から 六甲クラブ特製ピサパイ ¥1,000 ひらめ 小エビのクラ
タン ¥650 仔牛のチーズ焼 ¥700 ビーフシチュー ¥800 インドネシア料理(お二
人様用) ¥3,000 六甲クラブステーキ ¥2,500 定食 ¥1,000 ¥1,600 ¥2,500

1972 謹 賀 新 年



白金台、エメラルド・ダイヤモンド帯止 WG、ルビー・ダイヤモンド帯止とブレードペンダント兼用 白金台、エメラルド・ダイヤモンド帯止とブローチ兼用

Tajima
***宝飾店 **タジマ**

元町2・TEL 331-5761(代)

タジマでは、宝石の鑑定を無料でご相談に応じておりますのでお気軽にご利用ください。

衣裳を次々と創りました。黒と赤の女大名縞などはその代表でしょう。昭和になって、舞踊家の故西崎緑さん、代議士の藤原あきさん。現在活躍中の方では舞踊家の吾妻徳穂さんが最高ですね。

一九七二年は中国文化が世界的にクロージアアップされてくるので、洋服もきものも流行が中国ムードになるでしょう。そして、何ごとも心情真価が、愛情のあるものが評価されるとき、日本が日本であるべきときといった年だと思います。きものも高額商品と高級商品のちがい、価値観の真価がとわれると思います。そんな流れの中で私は、女性の一人一人の生命のために、着て楽しく、見て美しい作品を今年も創りたいと願っています。

（写真は前田親夫さんのデザインされた衣裳を愛好される芦屋にお住いのみやび流押絵家元小西絹甫さんとお嬢さんの松恵さん〈神戸女学院大三年生〉に北野町の異人館前で新春の装いを楽しませていただきました）





大吉の春……

今年も よろしく
お願いいたします。

1972 元旦



結納儀式用品

遠藤福寿堂

東店 トアロード那寿2階

TEL. 391-1871～3

西店 長田区市バス菅原東入る

TEL. 575-2251～3

モデル / 西尾雅子さん

ヘヤー・着付 / レディースサウナビューティサロン

Mademoiselle de Kobe

あけましておめでとうございます

近代的で明るいお嬢さん

西尾悦子さん (22)
KK. ワールド勤務

彼女の第一印象はくるくる動く表情豊かなおめめ。日曜日には自分のおへやで油絵を描いたりお琴のけいこをしたりお家にいる方が好きなんだそう。勤め先はファッションメーカー。今流行のかわいいかえるのバッヂをチョコンと付けてたり、とても近代的で明るいお嬢さんです。

ヘア・着つけ/レディスサウナビューティサロン

ボンスタイル写真室

児島寛二

神戸市生田区下山手通2丁目1-2
TEL331-3668・7034 生田神社前





上はさんちかギャラリーで開かれた「神戸の100人」写真展

人間の面白さ追求した 『神戸の100人』 出版記念会開く！

「男くさい男」女性の取材が多かった——胸に赤いカーネーションの花をさした記者たちが一人ずつ紹介され、照れながら会場の拍手をあげた。朝日新聞神戸版と神戸・明石版に、ことし三月から登場、人間の面白さを探り、反響を呼んだユニークな連載もの、神戸の「100人」が本（神戸新報版）になり、その出版記念会が、十一月二十七日夜、神戸貿易センタービルのレストラン「バーグ」で開かれた。シリーズのしんがりに登場した宮崎辰雄神戸市長や一谷定之、神戸市副知事、大阪フィル常任指揮者朝比奈隆氏、書道家でテレビタレントの望月美佐さんら各界のはなやかな顔ぶれが、夫人や



上左は右より安倍朝日神戸支局長、一谷副知事・望月美佐、重森朝日通信部長、上右は山電山本氏、朝比奈隆氏、竹中郁氏、下左は大盃でカタキをとられる朝日神戸支局記者諸氏、下右は三人のカメラマン紹介。

この夜、道化座の阿木五郎さんの軽妙な司会で、パーティーの雰囲気は盛上がり、記者紹介では、「神戸っ子」編集部や神戸の女性グループ、「マカンブッサル」から、重森部長や勢ぞろいした、サムライ「たち」に花束を贈って、いろいろをそえた。

このあと登場人物も、それぞれ壇上に上がり「よくもまあ書いたわね」と担当した記者を引っぱり出して反論したり「おれは斬られたが腹はたたなかつた」とケロリと感想をもらす人もいて、会場はヤジやら爆笑で、和気あいあい。

最後にシャンソン歌手の堀郁子さんが、愛の唄を歌ったあと、みんなで「すみれの花咲くころ」を合唱、フォーク・グループ「ロストシティー」の歌や参加者のかかし芸も飛び出して、楽しいパーティーを終えた。

友人を同伴して出席、ホスト側の朝日新聞社は安倍義人支局長と記者、それに連載当時神戸支局長で企画をプロデュースした重森守大阪本社通信部長を加え、総勢百三十人を越えるほどの盛会だった。

「単なる人物紹介ではない、人間を通して社会をのぞく一種のニュース取材、記者は体当りで取組んだ」と安倍支局長があいさつ。

一〇〇人に登場、斬られた人、斬った記者ととも乾杯をし、出版を祝った。

盛大だったインターナショナルナイト



1972 KOBE JC INTERNATIONAL NIGHT

神戸青年会議所主催による恒例のレセプションが、11月27日(土) 6時30分から、そごう神戸店九階の大ホールで開かれた。

今年は「KOBE JC INTERNATIONAL NIGHT FOR WORLD FRIENDSHIP OF TOMORROW」のテーマのもと、各国領事15人、在日外人約50名が参加、JCのメンバーを加えて約350名が神戸らしいエキゾチックなナイトを楽しんだ。

また先日、神戸JCが長崎で南蛮紅毛美術展を開いたこともあって、この夜ははるばる田川長崎JC理事長もかけつけ、神戸JCの前途を祝した。

神戸の夜景を見下しながら、お寿司、おでん、焼鳥などの日本食に舌づつみをうった後、ショーを楽しみ、更けゆく夜を惜しみつつ、最後は福引きとゴーゴードンスで、親善パーティの幕を開じた。

写真左上・領事を代表して挨拶をするスカル
ブリーノ・スイス領事

右上・熱演する藤田まこと

他・各国領事と在日外人の交歓スナップ

左下・歌を唄って肩くみあって。今年もがんばろう



KNIT KNIT KOBE

Jan.

海におちた冬

アミアミジグザグ

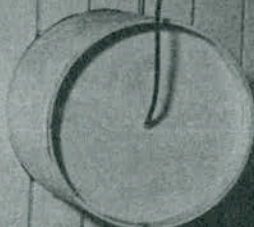
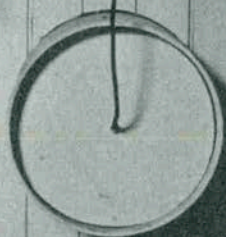
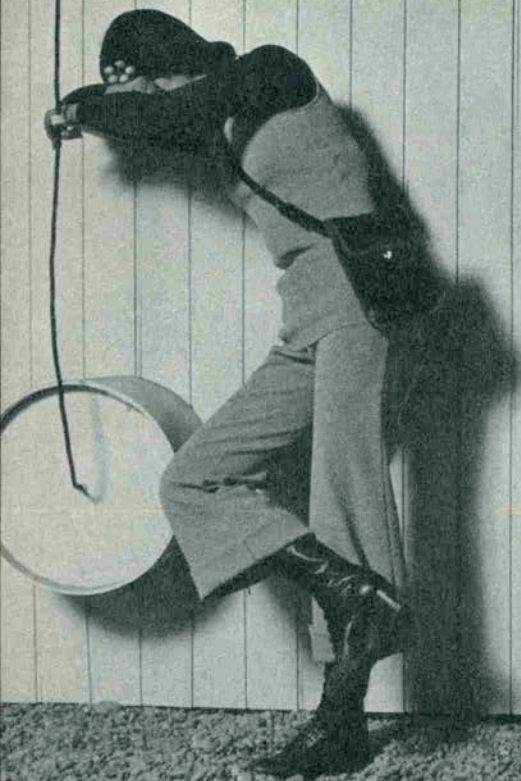
大好きな冬いってしまって...

ニットで過したここの冬

あったかい春がきたら

ウスウスニットで

飛んで行っちゃおうかな





林 煙
示 示

神戸5
22-84

神戸で生まれた一九七二年の
オリジナルニッソ十二月
一月は、ニッソメーカーの
草分け、ニッシン。の春の作
品。北風の中でも春をよびま
す。

コスチューム/ニッシンKK
カメラ/藤原保之

モデル/浜野豊子ヘユニオン

マードリンストンバーク

帽子・バッグ/三愛

AD/神戸つ子